

## 研究発表もうしこみフォーム

氏名：中井 健太

氏名のローマ字表記：Nakai Kenta

所属：大阪大学人文学研究科博士前期課程

専門分野：モンゴル近代史

発表のタイトル：G. E. グルム・グルジマイロのモンゴル研究—チンギス・ハーン金髪人種説と Hu=Mongol 説—

発表要旨（600字～800字程度）：

モンゴル近代史において、ロシア・東欧の東洋学者は様々な面で重要な役割を果たした。本発表は、従来あまり注目されてこなかった G. E. グルム・グルジマイロのモンゴル史研究を、人種・民族の記述に焦点を当てて分析し、そのモンゴル近代史との関係も考察する。ジャムツアラノとも深い相互扶助関係にあった彼は、生物学者としてキャリアを歩み始めたが、中央アジアへの探検や新聞の編集・執筆の仕事を経る中で、モンゴルを中心とした内陸アジアの歴史に関心の比重を移していく。そしていくつかの根拠をもとに、「チンギスハーン金髪人種」説を唱える。この説に対しては、ジャムツアラノも関心を寄せたようである。

グルム・グルジマイロは、モンゴル史上に現れる Dinlin（丁零）、Di（狄）、Hu（胡）に関して独自かつ高い水準の研究を行った。中でも Hu（胡）をモンゴルとみなすことは、古代史にまで「モンゴル」の存在を遡らせる試みでもあり、政治性を帯びうる。そして、この議論は A.アマル『モンゴル略史』にも引用され、モンゴル帝国以前も「モンゴル」が客観的実態として存在したことを主張する根拠のひとつとされた。近代主権国家として独立したモンゴルの初期の自国史・自民族史の記述における、古代史の枠組みの由来の究明は課題として残されているが、本発表はその一端を明らかにする試みでもある。

近代世界における「民族」をめぐる研究は、1980年代頃から構築主義的分析の流行とともに盛んになり、現在でも重要なテーマだ。白鳥庫吉のドイツ語論文なども参照していたグルム・グルジマイロによる、生物学的な民族・人種を軸にしたモンゴル史の叙述の試みとその影響を分析することは、近代科学のユーラシア規模での伝播と変容という意味で、グローバル・ヒストリーあるいは科学史の文脈でも興味深い。